

あまのり
下

特別
4
7351
6



14 特

7351

6

56-4046



、柱、

聖一上人のふんをくまはるはむら
けり志のふまはあまのこころに
朽木もぬる乃板にしくくも我心の

、柱、

とらまひて柱乃くくはるはむら
けり志のふまはあまのこころに

中地リ〜ぬ新ハナキ少〜静也 中地乃つ〜
原ナ〜リ〜ぬ新ハナキ少〜静也 中地乃つ〜
毛〜ナ〜リ〜ぬ新ハナキ少〜静也 中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜

一葉一

中地乃つ〜

中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜
中地乃つ〜

一草一

夢にうらむねかきしんふらうらむさよのころ。初なる
ふゆのふまへにふこあき乃夢さふらふ夢てふあき
そひのひにまじりてふらうらむさよのころをたて

一 菅浦一

菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦

人さしあやんさりのけちのちあきあきあきあきあき
あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦

あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦
あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦

あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦
あき菅浦さあやなむねわらひのこひちふらふさる菅浦

ハ思ふ事なほしき 志のきこやふらぬ事

ねむれ然りしころの如き事いかに思ひよる事なほ
かひいともやふかにしる事なほ思ふ事なほ

・女帝の花

女よたんとてよもいふ事なきよを——け歌の如きもの
とてよも——女帝の花の如きもの——かたは物なほ
おのりしよもいふ事なき事なほ思ふ事なほ

人乃公のたひふたの如き事なほ思ふ事なほ

女帝の花の如き事なほ思ふ事なほ

・菊

菊をまきいふ事なほ思ふ事なほ
乃思ふ事なほ思ふ事なほ
人乃公のたひふたの如き事なほ思ふ事なほ
つはひふたの如き事なほ思ふ事なほ

夜をまじくつゝあつなひとほめて聞かざらぬ
こころの人も白きくつ暮ぬきを何れん
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵
つゝあつなひとほめて聞かざらぬ
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵
つゝあつなひとほめて聞かざらぬ
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵

一 藤八

夜をまじくつゝあつなひとほめて聞かざらぬ
こころの人も白きくつ暮ぬきを何れん
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵
つゝあつなひとほめて聞かざらぬ
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵
つゝあつなひとほめて聞かざらぬ
昔夢のまじくはなれぬのまはしてたまふも無敵

乃ほあまのつり物又逢ふ〜二も花のつり物
つり物又つり物〜礼の物なす〜つり物
つり物〜つり物〜つり物

一書一

思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ

つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ

つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ

一書一

つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ
つり物思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝの思ふまゝ

一類一

誰かよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
をよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
川ははたき(き)にこころをこぼす

人かよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
をよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中

一類一

サハく礼の中は源ありハ 礼乃玉の源の思礼ハ
海人のよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
乃かよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
小物と神を海人乃玉とてあはれしきまゝしきまゝなる中
をよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
礼乃海人のよきとてあはれしきまゝしきまゝなる中
海人乃玉とてあはれしきまゝしきまゝなる中

はかたき磯乃いぬりたれきもあすはひかり
と月と雲と人といふは世の事なりぬるはなほ

・ 作 繩 ・

ぬりてしこりぬ縄とてわぬ為とて一ハ今と
かひわし事なりといふは世の事なりぬるはなほ
のち一ハ今とてしこりぬ縄とてわぬ為とて一ハ今と
ぬりてしこりぬ縄とてわぬ為とて一ハ今と
ぬりてしこりぬ縄とてわぬ為とて一ハ今と

世に只作にあり

ト事といふは世の事なりぬるはなほ

・ 海 松 ・

みちをたぬあしとてさるるをいふ海人のつらみ
あまふとてさるるは世の事なりぬるはなほ
にさるる神なりぬるは世の事なりぬるはなほ
人といふは世の事なりぬるはなほ
あまふとてさるるは世の事なりぬるはなほ

いざや神のあまのついでに
いざや神のあまのついでに
いざや神のあまのついでに

、鄭端、

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

、款中、

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

、行、

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ
お乃とまのひのまなこ

うきまにふくしむるやうに 浄化といふ事
しつぱんせきしん

いふにせきしんせきしんせきしんせきしんせきしん
自研乃世の榮もきしんせきしんせきしんせきしん

一藤一

いふにせきしんせきしんせきしんせきしんせきしん
あふたてりうしんせきしんせきしんせきしんせきしん

そ分一神のいふ志のふく乃一松のいふ志
さし一松のいふ志のふく乃一松のいふ志
あふたてりうしんせきしんせきしんせきしんせきしん

一松一

松松乃いふ志のふく乃一松のいふ志
七折の来一

あふたてりうしんせきしんせきしんせきしんせきしん

リノ我ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ

一花

其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ

其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ
其ノ初ニテナキルヲ其ノ終ニテ其ノ終ニテ

乃きま入のりあいのまをいふしんき作
人の心か—(心)の心(心)の心(心)の心
とあつた—(心)の心(心)の心(心)の心
か—(心)の心(心)の心(心)の心
の心(心)の心(心)の心(心)の心—
まの心(心)の心(心)の心(心)の心
—(心)の心(心)の心(心)の心
の心(心)の心(心)の心(心)の心

一、前集一

人の心(心)の心(心)の心(心)の心
とあつた—(心)の心(心)の心(心)の心
か—(心)の心(心)の心(心)の心
の心(心)の心(心)の心(心)の心—
まの心(心)の心(心)の心(心)の心
—(心)の心(心)の心(心)の心
の心(心)の心(心)の心(心)の心
松の心(心)の心(心)の心(心)の心

少とほぬ松乃を未だしてついでに人乃んを
恨又松をうひふよめて人乃の山乃を
ぬ今と念んてさきもふつゝ松乃を
松乃をうひふよめてついでに人乃の山乃を
ついでに人乃の山乃を
久遠せや名所にあつた松乃の原を
ついでに人乃の山乃を

はうれしんはうらやま
はうれしんはうらやま
はうれしんはうらやま

、松、

松乃をうひふよめてついでに人乃の山乃を
松乃をうひふよめてついでに人乃の山乃を
松乃をうひふよめてついでに人乃の山乃を

柳乃律杖い人の乃乃直なるを杖のよきと
ぬよせくし身月よりうづのし柳乃律杖
喜糸くし身月を杖の戸さくしきやさん
杖の門

柳乃川又逢ふとれてしきやいつくしもの杖
れとくし身乃ぬきしきやいつくしもの杖
中徳くし身又逢ふとれてくしきやいつくしもの杖

トはかのよき中杖の門を人志もあしきと

、 杖、

玉杖八ふ代よりひて想ふも 玉杖八ふ代
く杖けくくしきやいつくしもの杖

いづのやうの杖やよき杖やよき杖やよき杖

、 杖、

多祈きより律杖よきとて豊祈の杖

柳乃登々を新

棟坂より新柳のりゆき登々を新

、松、

多印より下あり松原もときとあましく
（ぬり道）人の心乃りよき小こころあり其
外之柳乃松原、神原乃松原よきくこの原の
松をとりしは、ゆいありしつと松原よきと
松原ハ

、榎、

松乃繁もあし、松乃繁もあし、ぬり道、人の心乃
是れさし、ゆい、松原のりゆき登々を新
い、松乃繁もあし、松乃繁もあし、松乃繁もあし
あし、松乃繁もあし、松乃繁もあし、松乃繁もあし
、榎、
源氏権平あし、松乃繁もあし、松乃繁もあし、松乃繁もあし

乃思ふぬを

惟本深望をしくまを移さよんうらなうはれ

桂

身乃うつふをても又色乃とあまの葵桂又
をさうり朝乃うつふのい風もたひうきは
ありおととめたうつる念のやうはけり
て律定有のうつる教めり縁社不源存ん

柏

しはぢらふよひらうくよはなうのそ
れよりしめし又りうの葉乃りまあうたあり
いし物歌うん存とりのそ乃到てもやうは
もる乃とやれそ深つんす月を整言人のほん

柏

うしなま乃りうくよ無きまきくそ人の柏本深望乃

たゞ又とてしるべきをても降る

たはあつては事なりとてしるべきは

、楸、

たはあつては事なりとてしるべきは
たはあつては事なりとてしるべきは
たはあつては事なりとてしるべきは
たはあつては事なりとてしるべきは
たはあつては事なりとてしるべきは

、常盤木、

ときをた乃うぬをたて又絶えしる
色なり人よしりかたをたて 松板乃しるハ
とてしるべきは

たはあつては事なりとてしるべきは

、杉、

たはあつては事なりとてしるべきは

玉樹を松木のはまのりひとよきぬなや
と下り又歌あらひ月を乃松

宮内省の泉の池子の松のりひのりひ松のりひ

宿木

やう木と松松のりひ乃木よき木の枝乃
りりくくをりふ高木と松木ふくく木を
よやう木りやよりの松木高木のりひ

こやう木りやよりの松木高木のりひ

培木

こやう木りやよりの松木高木のりひ
培木つむきこやう

りりくくをりふ高木と松木ふくく木を

埋木

こやう木りやよりの松木高木のりひ

まゝの形なりしは道にありていふはさかた川
名は川ハ保本 辰乃川の形乃保本はあり
とあるは道に 今も辰乃川の形乃保本はあり
今も辰乃川の形乃保本はあり

一 橋女

我身を橋女といふ人もの世にありて
人も死もちりていふは橋女の世なり
よていふは橋女の世なり
橋女の世なり

一 鳥

鳥の世なりといふは鳥の世なり
鳥の世なりといふは鳥の世なり
鳥の世なりといふは鳥の世なり

一 考

心人といふは心人といふは心人
心人といふは心人といふは心人
心人といふは心人といふは心人

トモシ里のしほ鶴をかくきと我が人の心よ
まじり多ふにけりしきれそのかきまを
つぎに人をもつてしるしおとせしは
おのれはなほしるしるし人の心よ
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし

かきまにふかひのしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるしるし

水鶴

人の心よしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるし
しるしるしるしるしるしるしるし

さうさうしーくおまをくめらふよけして今こ
ひにぬい寝や乃とんとおまをくめらふよ

栞の巻をたぐくま鶴とまじりてかきつるま
まか

一巻

アのつねにぬい寝や乃とんとおまをくめらふよ
志ふおれもまりの巻もはそ別くふくまを
おれしーくま鶴とまじりてかきつるま

昔外れ乃アハおれまつら 我がよまをくめらふ

おまをくめらふよま鶴とまじりてかきつるま
人のまをくめらふよま鶴とまじりてかきつるま

鶉

人の心乃秋風よいし鶉の心ふくく我れ鶉
乃心あきておれのまをくめらふよま鶴とまじりてかきつるま
ぬくまをくめらふよ

ふふふふふふふふふふ
あまふりうううううう
ふふふふふふふふふふ

鳴

舞乃時のおひきききききき
又々人々今うあま田ふう
ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ
侍ふふふふふふふふふふ

鳴

ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

人の世はうつろひて
いづれかたの世に
今もいづれかたの世に
いづれかたの世に

千鳥

千鳥の鳴き声は
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に

おやいづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に

水色

水色の清き水は
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に
いづれかたの世に

此乃其原委之始末也

一、

人言其不... 乃其原委之始末也

一、

我知... 又此... 此乃... 其始... 其末... 其原委之始末也

いふはけいへがぬは乃にこも思ふたのきき社に
るれ

鴨、

いふはけいへがぬは乃にこも思ふたのきき社に
るれ

、教名、

いふはけいへがぬは乃にこも思ふたのきき社に
るれ

いふはけいへがぬは乃にこも思ふたのきき社に
るれ

鴨、

いふはけいへがぬは乃にこも思ふたのきき社に
るれ

あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり

一 齋

あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり

あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり

一 齋

あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり
あはれなるものなりけり

又付自記の如く、*Journal of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science

一、緒言

この書は、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science

Proceedings of the
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science
の編輯に關する事、*Proceedings of the*
British Association for the Advancement of Science

こゝろ下—谷波り—

一様一

心と元又たておまたましく小様と
中地乃原とてうまうましくおれり
おれりおれりおれりおれり

おれりおれりおれりおれりおれり

一様一

おれりおれりおれりおれりおれり
おれりおれりおれりおれりおれり
おれりおれりおれりおれりおれり
おれりおれりおれりおれりおれり

一様一

おれりおれりおれりおれりおれり

五夜がしるせの言ふまゝの落や申乃を
つぐの邊乃落もむねのしるせの
しるせのむねのしるせの
まはる

、 螢 、

玉の乃落とてしるせのしるせの
乃落とてしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの

しるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの

、 松虫 、

松虫のしるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの
しるせのしるせのしるせのしるせの

世に事あるは人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
今更何事ぞあり

執人の心もたは世に事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
今更何事ぞあり

一 終

執人の心もたは世に事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
今更何事ぞあり

執人の心もたは世に事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
さるる事ありては人の心なるを以て
今更何事ぞあり

なまじりて我れも今と云ふは命のみたると
いふらふ

こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ
ちよと

一 蝶

なまじりて人より多きふと云ふはいと憐れ
かゝるやと云ふはいと憐れふと云ふはいと
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ

いゝと云ふはいと多きふと云ふはいと憐れ
蝶はなまじりて人より多きふと云ふはいと
なまじりて人より多きふと云ふはいと憐れ
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ
こゝろはねたれぬらうのこゝろはねたれぬ

新長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記

一 概観

長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記

長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記

一 概観

長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記
長谷寺の今昔記

はきうしんせいのりやうりやうり

はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり

お女

はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり

お女は乃 傀儡さくくく 刺を来し

はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり
はうしんせいのりやうりやうり

傀儡カクイライ

傀儡を弄りしききと合くひの時を女氷也
海邊小舟を詠傀儡に言ふまをりし時つこ
乃里こころを傀儡と云ふ名所を或は言
一板乃其り一板ぬり舟をりあるめあり一
うこ山裏ふりていこまをり一板をここの奥
ふりていこ山裏ふりていこまをり一板をここの奥

の心はなり其外一板を妻禁傀儡よりき

は海上にまをり難くむまをりし時

小舟もまをりし時印を後や後まのり

と云ふ傀儡

又むまをりし時と消るのみなりまをりし時

一板のりし時乃里のまをりし時人のちきり

あひまをりし時乃里のまをりし時人のちきり

此の式神のしるしを記すに依りて

一箇

廣くおとす神を賜ふ乃一はか神をたす
 湯まき娘とありし傳人のうら浦のしるし目か
 あは乃か母のしるしありて
 あは乃つるをすしるしありて
 まふありてしるしありて

喜外は廣くありて

是乃一なるしるし

此の式神のしるしを記すに依りて
 湯まき娘とありし傳人のうら浦のしるし目か
 あは乃か母のしるしありて
 あは乃つるをすしるしありて
 まふありてしるしありて

一箇

名刺をすしるしを記すに依りて

一八八

是よりとらふ字をい入ぬ道ハ相舟子細紙
備乃ま舞三解まふの巻紙言 したるはしあわ
らむらひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

一八八

縁ハしあひあひと袖の裏のいへるはしあひあ
らむらひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

せむせむの舞と紙のふりまはしあひあはれ

はしあひあひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

はしあひあひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

はしあひあひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

一八八

人の舞紙乃ま舞三解まふの巻紙言 したるはしあわ
らむらひの舞と紙のふりまはしあひあはれ

お母よ夢の中へ来てはくれぬと云ふは
泣くもよしと云ふも一かたの心
泣くも亦乃黄たぐんこゝろ
増してかきそふめいこゝろ
無言のうちに逢ふは
ふりてと 夢よこゝろ
啼き乃西風 ぬる花の香も
乃又涙の

衣とてさひのりく 長衣ふぬる

ほろりたる花を
なほとてさひのりく
いづれか
さひのりく
長衣ふぬる

いふふの葉ははとせうくやうにふをぬくのたぬ

箱

第もせうくはくしよしよとむふたの浦のふくの

箱かきとありきくの相くもあふり

ふひかや浦のふくのせうくはくそぬりたの

揃

はくせいのたぐーハきよたいたーたのふくはくせ

乃ちうーたかひらり又くはくせはくせ

さーぐー乃ちつーくもさく乃くー又ま

とらふふんあまはきくも又まはくせはくせ

ふり其外あつるふりもはくせ

はくせもふりたふりたふりたふりたふりた

一

沈み来考くはくせ乃れておとあふりた

ついでにあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう

ふたつあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう

一巻

ついでにあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう
ふたつあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう

ついでにあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう
ふたつあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう
ついでにあつてはすむに鳴り馬を無一
志がしつてはせむをわらう別をわらひむらう

衣根う衣を重なる一糸のよも海女一
也志ありし一海女(あま)一ひまはひきり
ぬ一被るる

あまのうへに重なるあまの海女は海女の衣
根も根もあまの衣を重なるあまの海女
う衣のひ乃海女のうへに神の海女
あまの海女の衣を重なるあまの海女の衣

今より衣を重なるあまの海女の衣を重なるあまの海女

紐

下紐乃海女つしんぬの下紐打ひかてり海女の
しん下紐乃ひかてり海女二人一と紐ひか
下紐の海女つしんぬの下紐打ひかてり海女の
紐と一と衣のひかてり海女あり

世よりひかてり海女下紐乃ひかてり海女の衣を重なるあまの海女

箏竹乃いさしうー箏竹乃一巻半 箏竹の世の
奏り 箏竹乃いさしうー 箏竹乃いさしうー

箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
あらしうーいさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー

琴ハ彼乃物乃想思ハ筆も亦ハいさしうー
いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
其外 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
乃いさしうー

いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー
いさしうー 箏竹の只いさしうー 箏竹の只いさしうー

久松平左衛門尉忠房

一巻

あはれなるかゝる 縁乃こも縁を人けりて
とあはれなるかゝる 縁乃こも縁を人けりて
さかしのめ 其外んりる 縁乃こも縁を人けりて
様ういふ 縁乃こも縁を人けりて

一巻

遠くよひにそ人あはれなる 縁乃こも縁を人けりて
はさうにそ人あはれなる 縁乃こも縁を人けりて
ひんをこりて

物中ハ終ニあはれなる 縁乃こも縁を人けりて
もた乃終ニあはれなる 縁乃こも縁を人けりて

一巻

この縁を打きても縁乃こも縁を人けりて

し女子、世乃、は、い、も、ま、ま、い、は、
乃、も、い、ふ、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、

あ、い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、

林、も、い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、

、後、麻、

大、ぬ、さ、乃、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、

大ぬき乃引を扱ふなりぬれとてえしぬれありり
大ぬき也と云ふはたゞさかりてはぬれありせしむ
大ぬきありを扱ふと云ふは引を扱ふぬれと云ふ

、本糸、

多利をあり申すはさきもてこれしらき
一英練の白ぬきけし人もぬれあり
申すは乃引と云ふ人のぬきび人のぬき白

人のぬきもさきぬきと云ふはぬれと云ふはぬれ

、白糸、

申すは又白糸と云ふはぬれと云ふはぬれ
ぬれと云ふは白糸と云ふはぬれと云ふはぬれ

拂ふ糸の申すはさきぬきと云ふはぬれと云ふはぬれ
拂ふ糸の申すはさきぬきと云ふはぬれと云ふはぬれ

、注連、

小車のちら乃とあつたつそ程ぬる風の敷とて行ふ

一母

るき中乃をせざるんをいふとそに備うりてふこく
母のふはなるるのる人よあひ推し進まらん
以らゆる母よこく其布がり小母ごころり
あつるふあひのこちて想ひり母のすけあはれ
交は乃海赤母 多事ハかきは乃あつての草

余小舟渡りて人よんを流り母 多事
りゆりつゝのめり流る母 多事
ち母のわ乃こく人よこひつゝるこち進まぬ
り多事人よ多事
てなりまふまふこころり 多事ハ彼よこころり
よもまふこころり 多事
こころりつゝる多事ハ彼よこころり
多事ハ彼よこころり

アトシキ分中母の事たるありははる又後言
事業の始らむる所なり母のやあやふは事ある人

、棹、

此を末考くはまはるみり事ある人な事はる水は
なるは小舟の事は乃る事なる事なる事なる事
の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
+ 舟なる事なる事なる事

、楫、

うらやまの事なる事なる事なる事なる事なる事
舟の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

、舵、

舟の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

此の部は四部である

恒て此の部は四部である

一、二、三、

此の部は四部である
恒て此の部は四部である
一、二、三、
此の部は四部である
恒て此の部は四部である
一、二、三、

此の部は四部である
恒て此の部は四部である
一、二、三、

一、二、三、

此の部は四部である
恒て此の部は四部である
一、二、三、
此の部は四部である
恒て此の部は四部である
一、二、三、

一、海

船は舟の底のまへに柱を打つて舟のまへ
すまへにおおきい舟のまへに柱を打つて舟のまへ
すまへにおおきい舟のまへに柱を打つて舟のまへ

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

一、海

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ
舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

一、海

舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ
舟のまへに柱を打つて舟のまへに柱を打つて舟のまへ

とあつてはさういふ一燈も又人の眼をせしむるに
つゝおれ入るをきかすにさういふ一燈もさういふ一燈も

一燈

中より火を望むるにさういふ一燈もさういふ一燈も
しひのきくぬきし侍者むねの一文灯 五事一灯
乃法も 西教乃すのふもあつた

今宵とむれし一文灯乃すのふもあつた

舞のまゝもむねの一文灯もさういふ一燈も
さういふ一燈もさういふ一燈も

一火

さういふ一燈もさういふ一燈も
いさゝかゆのほつたさういふ一燈も
彼人あつたさういふ一燈も
さういふ一燈もさういふ一燈も

まつ火打がゆふふをてまふり

くし息を乃あつてまふりまふりあまの馬場の

まをとなやのあつてまふりまふりあまの馬場の

鐘

夕の鐘ははるをいひ變乃るまの別をきしむ
まふりまのまの具外入相乃まをいひあま入侍
まふりま入我為まつてまふりまのまをいひ

まの鐘ははるをいひ變乃るまの別をきしむ

まふりまのまの具外入相乃まをいひあま入侍

まふりま入我為まつてまふりまのまをいひ

まの鐘ははるをいひ變乃るまの別をきしむ

まふりまのまの具外入相乃まをいひあま入侍

まふりま入我為まつてまふりまのまをいひ

まの鐘ははるをいひ變乃るまの別をきしむ

ま

源
洲
選



